

(様式第3号の1)

博士(甲)論文審査及び最終試験結果報告書


平成26年 3月4日

福岡女子大学大学院  
文学研究科委員会 殿

論文審査及び最終試験委員

主査 C.S. Pugh 

副査 徳永紀美子 

副査 M. Warren 

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏名
英文学専攻博士後期課程	09英博後03	ブイ・ティ・ホアン・ザン
審査論文題目	Trauma and Psychological Losses in F. Scott Fitzgerald's Novels	
論文審査及び 最終試験報告	(合) 否	
博士論文提出資格取得日	平成25年 5月07日	
博士後期課程退学日	平成25年 9月30日	

## 論文審査及び最終試験結果の要旨

論文題目 : Trauma and Psychological Losses in F. Scott Fitzgerald's Novels

提出者氏名 : Bui Thi Houng Giang (ブイ・ティ・ホアン・ザン)

### 論文概要 :

本論文は、20世紀アメリカ作家であるF.スコット・フィッツジェラルドの主要長編小説の分析にトラウマと喪失に関する精神分析学的研究がどこまで適用可能かを探った、体系的で広範な研究である。そのような大規模な取り組みゆえに、長さの都合上、焦点は主要5作品の男性主人公に絞られ、それ以外の観点、つまり、作者の心理、語り手の心理、女性登場人物のトラウマ、その他の関連する話題は、議論上の2次的、補助的根拠として扱われている。最終的に本論は、トラウマ理論がフィッツジェラルドの作品研究に有用な分析方法であることを示している。

論文は序論、5章からなる本論と結論で構成されている。序論では、まずトラウマと喪失に関するフロイト精神分析学知識が概観され、この知見はフィッツジェラルドの存命中に広く知られるようになったものであることが述べられている。次に、最近の理論、キャシー・カルース、ドミニク・ラカプラ、シヨシャナ・フェルマンその他の理論家の概念が紹介されている。それによって、トラウマと喪失の影響は、必ずしもホロコーストのような大惨事だけに限定される必要はなく、ラカプラの表現を借りれば「愛する人の死のような個人的レベルの特定の出来事」も含みうるという、本論での議論の基礎が作られる。この基礎的理解に則り、本論では各代表作の分析を行っている。第1章では『偉大なるギャツビー』が次のような焦点——理想の恋人の喪失が与える影響、反復強迫、強迫性投影、トラウマ発生前の時間を回復しようとする試みが周期的に起こることなど——に基づき論じられる。第2章は『楽園のこちら側』が分析され、焦点は主人公の人格不統合、代理父を求める絶望的で強迫的な試み、愛の対象に向けられるありえないほどの理想化に置かれている。第3章は『美しく呪われたもの』における経済に関する強迫的想念、つまり富にまつわる不安が扱われ、個人レベルの経済生活もまた人格形成を阻害する隠された精神的トラウマと喪失を反映することが論じられる。第4章では『夜はやさし』を題材に主人公が生涯に渡りいくつかのトラウマを体験するものの、結婚、不倫、仕事のすべてが絡みあって、ヒステリー性幻想、強迫性同一行動反復、性的投影、その他の精神的障害が起きていることを分析している。最終章では、『最後の大君』は未完の作品ではあるが、主人公がハリウッドのプロデューサーとして成功したにもかかわらず、妻の喪失というトラウマを継続的に繰り返し、別の女性を理想化して補完しようとする様子が描かれていると論証する。結論では、精神分析の多様な概念はフィッツジェラルドの主要作品の男性主人公の描写を分析する際に有効であり、またこの先、彼の他の作品や失われた世代の他の作家たちの作品を研究するうえでも有益な手段であることが、これらのケース・スタディを通して実証されたと結んでいる。

### 講評 :

本論文はフィッツジェラルドの長編小説を分析するのにトラウマ理論が生産的な手段となり得るかどうかという批評上の問題を広い範囲で研究し、巧みに構成した論考である。「手段となる」という結論は

説得力を持って示されている。

フィッツジェラルド研究への新しく興味深い特別な貢献がその広範な考察の中には見られる。例えば第2章では、今までほとんど議論されなかったフロイトの論文、つまり、代理父としての悪魔に関する論文と学童男児の心理状態に関する論文が取り上げられ、『楽園のこちら側』の主人公の精神的迷錯が解明されている。また、一般的には社会経済学の理論家として知られているT. ヴェブランの中心的理論が登場人物たちの経済上の不安を明確にする手段として効果的に使用されている。

もちろん、本論文には弱点もある。その多くはフィッツジェラルドの小説のみならず精神分析理論やトラウマ理論をも極めようとする当初の野心的な目標に起因する。例えば、主人公たちの心理状態は往々にして症状のカatalogのように列挙され、文学批評や心理学として最も興味深いはずの描写の細部があまりに簡潔に扱われている。同じく重要な課題としては、次に挙げる根本的な点がよりしっかりと説得力を持って議論されるべきと言えよう。すなわち、トラウマ理論は個人の心的生活を理解するうえで非常に多くのものを提供できるということである。しかも、その個人とは、戦争のような大惨事を経験した人たちである必要はなく、それでもなお、失われた世代を代表するような人々を指す。ここで挙げたような弱点はこれから先の研究において適切に取り組みなければならない。

まとめると、トラウマ理論の適用という広範な試みとトラウマと喪失に関する精神分析概念の特定の適用の両方において、本論文はフィッツジェラルド研究に意義深い貢献をなし、論者が博士号取得に必要なとされる批評的スキルと研究力の獲得に成功したことを十分に示している。